球体と僕と

サミが病気だと聞き、僕は大学があるにも関わらず、気がつけば実家に戻っていた。自分でも驚くような早さだった。もうサミとは関係ないのに。何年ぶりに名前を思い出した。

実家へ帰ってきたが、何も変わっていないように感じる。僕も変わっていないかもしれない。成長なしだ。若いのに。悲しい気分を引きずりつつ、サミのことを思い出す。

サミと僕は高校三年の後半、卒業の目前に付き合い始めた。サミから告白してきた。それは誰もいない理科室の前だった。傾いた太陽の弱い光が差し込む理科室の前に呼ばれた僕は緊張しつつ待っていた。緊張を悪魔化すため、自分の影を見つめてみて、問題を鳴らしていると、サミが下を向きつつゆっくり来た。対面するが何も言わない。彼女は唇を噛んで、スカートの裾を力強く握っている。僕と彼女の緊張が交わる。心臓を直接触れたように鼓動を感じる。そして、サミは顔をあげ、潤ませた大きな目が僕を見つめて、

「好きだよ、ワタベ君」

僕はなんと返事をしただろうか、緊張のせいで記憶が曖昧になっている。でも彼女は笑顔で、

「やった!」

と言っていたから、僕は何か彼女の喜ぶようなことを言ったのだと思う。そしてそのまま僕らは手を繋いで帰った。

彼女の手は柔らかかった。骨なんてないのではないかと疑って強く握ってしまうくらい。すると彼女は横を向き僕を見た。僕も彼女と目を合わせた。

サミの髪の毛は夕日が当たり茶色く輝いていた。肌が白いサミは目の中が茶色く見えた。目が大きく夕日の光を取りこんでいるのかもしれない。僕らは歩みを止めた。立ち止まり、目を合わせる。潤んだサミの目には僕が映り、まるで僕がサミを操縦しているように見えた。

風が吹き髪の毛が僕の手に触れる。そのまま僕は本能で彼女の髪の毛をなでる。柔らかかった。手も髪も柔らかい。その時初めて僕は女の子の全てが柔らかいと知った。なでるとサミはくすぐったそうに笑った。そしてまた歩き始めた。サミは

「ちゅーしないの?」と言う。

その言葉で僕は不意に思い出した。告白されたことで喜びすぎて、地に足が浮いていたので、サミには同級生男子全員が知っている噂を忘れていた。それは誰とでもヤっちゃう、いわゆるサセ子という噂。誰とでも付き合い、聞いた話ではうちのクラスの名簿順に付き合

っていたという。
そうか。
そこで、ひらめいたかのように気付く。僕が最後だ。もうクラスの男子全員と付き合って、名簿最後の僕、ワタベと付き合って目標を達成し高校を卒業するのだろう。
ああ、そういうことか。
浮かれて浮かんでいた僕の心はすぐに重力に負けて、地面に足が根付いた。どうやら僕は彼女を見つめていたようで、不思議そうに目を開き、首をかしげていた。その表情はすごくかわいかった。かわいいからみんな付き合ったんだな。噂があっても。

歩くのが、だんだん遅くなる。決して迷っているわけではない。今まで数回しか彼女の家に行ってないはずなのに、体がサミの家を覚えていた。だからこそ、歩みを遅らせた。変わっていない景色を変わったものと思い、観察しながら歩いた。景色を見ても思い出すはサミのことだった。しかしまだ病気のことが信じられなかった。僕の中で生きているサミは元気でいつもニコニコしていた。
そういえば、あいつはいつも笑っていた。だから僕はその表情に甘えて、最低と最悪を繰り返した。

「んっ、、、」
彼女は小さく声をもらす。サミの口から涎のように、僕の体液が垂れる。僕は猿になった。性を知り、精を尽くした。時間があれば彼女と体を合わせた。セックスができない時には口で性欲を処理してもらっていた。性欲はうねりと渦を巻き、僕の全てを飲みこんでいた。とどまることはなく、壁を壊すように次々に僕はサミと体を重ねた。
学校でも、トイレでも、どこでも。
今考えると、童貞を捨てたことで悦びを知り、どこか頭の回路が狂っていたのだろうとさえ思う。体が性を中心で動いていた。初めての彼女だったのと、自分が最後の彼氏だということが心に引っ掛かっていたのだろう。
僕が最後。フェラチオをしてもらっている最中考えた。僕は仁王立ちで、サミがしゃがみ僕のちんこをまるで工芸品のように丁重に扱う。
すぐに放出しないように思考を放り投げる。ああ、こいつは明石も、池田も、木村も、田辺も、山本もみんなの咥えたのか。彼女の顔を見つめる。この顔を見たのか。

呟えながら、髪の毛を耳にかける仕草を見て、彼女に何も言わず果てる。まるでＡＶのようだ。
「けほけほ、ちょっと、」
いきなりだったのか咳き込んでしまった。僕はまだ何も言わない。けほけほと言って少し苦しそうなサミを見ている。最低なことをした気分だった。このまま嫌われても良いと思った。
「でも好き」
サミが言った。僕にはわからなかった。何がわからないのかもわからなかった。

家の前に着いて、チャイムを押せないでいた。押してどうなるのか、押したらどうなるのか。病気はどんな病気なのか。意を決して押す。力が入ったまま押しても音は同じだ。
出てきたのは、サミのお母さんらしき人だった。家に来たことはあっても、会ったことはなかった。
「サミさんの友達で、」
説明をして中へ入れてもらう。久々のサミの家だった。ここでセックスしたこともあった。思い出がセックスにまつわるものばかりで少し落ち込む。会ったらなんて言おう。久しぶり、とか、やあとか言って笑ってみよう。調子に乗って、病気はどう？なんて聞いてもいいかもしれない。
部屋の前。サミの母さんは案内だけをして何も言わなかった。玄関で「来てくれてありがとね」と言われただけ。何かがおかしかった。襖の戸をあける。お母さんは僕の後ろで見ている。
いつものサミの部屋があった。入って左手には漫画ばかりの本棚があり、目の前には窓、そしてカーテンが風に揺れている。昨日来たかのように変わりがなかった。部屋の真ん中には布団が敷かれていた。
「サミ」
呼んでみたが返事はない。お母さんを見ると頷いたので、僕は毛布をめくる。ゆっくりと。息を飲んだ。この中にサミがいると思うと緊張する。めくる。めくった。
そこにはボーリング玉のような深緑色した球体があった。
「なんですかこれ」
すぐにお母さんの方を振り返る。

「これがサミなんです」
これが？
わからなかった。球体がそこにあるだけで、サミの姿なんてどこにもなかった。柔らかい髪の手も手も、そしてかわいい顔も、何もなかった。
球体。球体しかなかった。
「これが病気？」
頷くのを見た瞬間にまた球体の方を見る。触れるのにも勇気がいるが触ってしまう。
ひんやりと冷たい。高校の時何度も感じた、温もりとは大きく違う。これがサミなのか、サミ？
「サミ？」
と声をかける。振り向くと母親はもういなかった。
気がつくと、静かだった。

「そっか、東京か―遠距離になるの？」
「別れよっか」
「え」
「うん、」
「なんで、ワタベ君のこと好きなのに、」
「だって、お前、クラス全員の付き合ってたんでしょ、」
「なにそれ」
「うわさ、みんな言ってる」
「うそだよそんなの、ワタベ君だけだよ」
「うそ」
「うそじゃないよ、」
「ねえ、嫌だよ、」

「　　」

「嫌だってば、ねえ別れたくないよ、ねえワタベ君、ねえってば！なんで！ワタベ君！」

僕は球体になってしまったサミをなで続けた。なんで球体になってしまったのか、そんなことは分からない。もしかして、酷くフってしまったからかもしれない。後からわかったことだが、彼女は本当に僕が最初の彼氏だったらしい。

その日から、少しだけ心に固まりができた。それは今のサミの姿に似た深緑色した球体だった。

もしかしたら僕の心の中にできた固まりなのかもしれないと思った。

「ごめんね」

呟いた。窓からは太陽の光が覗く。

球体は抱きかかえて後悔するにはちょうどよかった。

球体と僕と

http://p.booklog.jp/book/40240

著者 : cm-journey
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/cm-journey/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/40240

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/40240

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.